

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 多様な狩猟技術と変わりゆく狩猟文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信, 川野, 和昭, 秋道, 智彌 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009114">http://hdl.handle.net/10502/00009114</a>

---

第7章

多様な狩猟技術と  
変わりゆく狩猟文化

池谷和信／川野和昭／秋道智彌

# 1 はじめに

## 目的と方法

世界の熱帯から温帯にかけての地域では、各地の自然環境や狩猟技術の歴史の違いに応じて、弓矢猟、犬猟、網猟、罟猟、落とし穴猟、銃猟などさまざまな狩猟が行われてきた。また、狩猟そのものは自然に強く依存する経済行為であると同時に、獲得した獲物の分配を通じて社会関係を維持する役割を持ち、獲得した野生動物に対する畏敬の念として狩猟儀礼をとまなう場合がみられる。

その一方で、狩猟の担い手が誰であるのにも注目する必要がある。彼らが、狩猟採集を産業の中心としているか否かで狩猟採集民か農民かに分けられるが、それらに応じて生活の中の狩猟の位置づけが異なってくる〔池谷 二〇〇五〕。本章の主な対象は「焼畑農耕民」であり、焼畑を主な生業としながら狩猟にも従事するような生業複合を实践する人びとである。さらに、現代の狩猟は、各国政府の狩猟禁止政策に大きな影響を受けてきたという状況にある。多くの国では、世界的に広がる動物保護思想の影響を受けて狩猟そのものが禁止されている。各地の狩猟者にとっては、ある日突然に、

事前に知らされることはほとんどなく狩猟行為そのものが密猟に変わってしまうことがある。彼らにとって、現在は苦難の時代になったといえよう。

本章では、以上のようなこれまでの狩猟を把握する際の枠組みをふまえて、メコン河の中流・上流域における①狩猟活動の実際、②狩猟技術と儀礼、③狩猟の変容とその要因を把握することをねらいとする。対象地域は、現在のタイ北部、ラオス北部、中国の雲南省というメコン河の流域に対応している(図1)。これらの地域では多様な狩猟技術が開発してきたが、現在、国家による狩猟規制などにより狩猟文化は変容を迫られており、地域によっては狩猟が消滅の危機に直面しているところもある。

以下、本章は、タイ北部の事例は池谷、ラオス北部の事例は川野、雲南の事例は秋道による聞き取りを中心とした現地調査に基づく研究成果を統合したものである。ただし、おのおのの調査内容を検討すると、ひとつの村での集約調査と複数の村での広域調査という調査方法の違い、および生業から儀礼までの狩猟への関心のあり方が各調査者で異なっているのがわかる。本章は、池谷が中心となってこれらをまとめたものである。

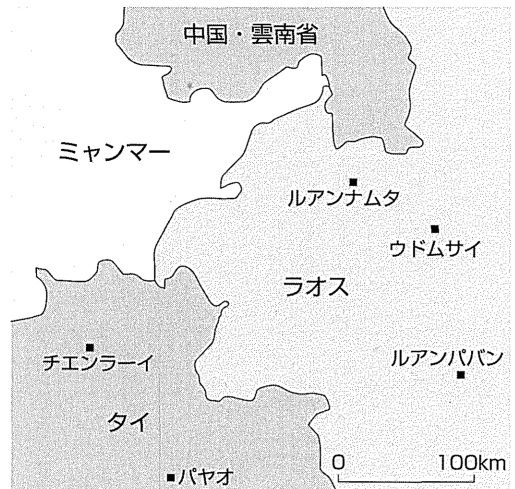


図1 調査地域

本章の調査地と対象民族は、以下のようにとめられる(図1)。タイ北部のパヤオ県ではヤオ(ミエン)族、ラオス北部では、①ルアンナムタ県のムシユダー族とカム族やラメット族とタイ・ルー族、②ルアンパバン県ムアンゴイ郡のカム族、同県のカムバック郡のタイ・ルー族、③ウドムサイ県のカム族、雲南省では一省全域に分布するイ族、ミャオ族、リス族、ペー族、プーラン族、ラフ族、チノ族、ワ族、ハニ族である。

## 調査地の自然、野生動物、人びと

雲南省の自然は多様である。西北から東南にかけて傾斜する地形にあり、西北部はチベットにつながる高地であり、南流する金沙江（長江）、瀾滄江（メコン河）、怒江（サルウィン河）の三河川が大峽谷（三江並流地域）を形成する。北部から南部にかけては哀牢山脈、雲貴高原が展開する山地と盆地群からなる。雲南省の平均海拔高度は三〇〇〇メートル、最高峰の梅里雪山（六七四〇メートル）から、ベトナム国境の河口（七六四メートル）まで海拔高度差は五九七六メートルある。したがって、気候や植生は海拔高度に応じてきわめて多様であり、高山の低木林帯から冷温帯の針葉樹林、落葉広葉樹林、常緑広葉樹、亜熱帯モンスーン林、熱帯雨林まで多様な植生帯が広がっている。また、ラオス北部からタイ北部にかけても、高所から低所にかけて、落葉広葉樹林、常緑広葉樹、亜熱帯モンスーン林の順に展開している。雲南省には、中国内で最も多くの動物種が生息する。また、保護対象種にも多数指定されている。脊椎動物だけでも、国家指定の保護動物が一九〇種（全国の六十・九%）、一級保護動物が三十八種（同四十一・八%）、二級保護動物が一五二種（同六十八・八%）となっており、雲南省が「動物王国」と称されるゆえんである〔徐 一九九九〕。

この地域の野生動物は、地域住民の自給用食料や生活用品としてだけでなく、ゾウ（象牙）、トラ（毛皮と歯）、シカ（麝香と皮）、センザンコウ（皮）、マレーグマ（熊胆）、クジャク（羽根）、ハコガメ（肉）などを代表として、多くの動物が医薬品、毛皮、食料、装飾品の材料として捕獲されてきた。また、イノシシや鳥、野ネズミなどは、イネ、トウモロコシなどの農作物への食害を防ぐためにも狩猟が行われた。こうした乱獲に密猟が加わり、これらの野生動物の多くが棲息地環境の劣化・減少により、現在、激減したり絶滅が危惧される状態にある〔Donovan 2003〕。また、ラオス北部やタイ北部の野生動物では、トラやクマ（ツキノワグマ）やシカのほかに、イノシシや野ネズミなど、雲南省のそれと共通しているものが多く、とりわけ大型哺乳類は乱獲や密猟によって激減している点でも共通している。

雲南省にはチベット・ビルマ語系、タイ語系の二十以上の少数民族が村落を基盤として分散居住している。人びとは山地から河川沿いの盆地にいたる環境勾配に応じて、水田・焼畑農耕と森林における狩猟・採集、河川漁撈を組み合

わせた多様な生業活動を営んできた（写真1）。この中で、山地居住のチベット・ビルマ語系のリス（倮倮）族、ヌー（怒）族、ジンポー（景頗）族、トウールン（独龍）族、ラフ（拉祜）族、ハニ（哈尼）族、チノー（基諾）族、タイ（傣）語系のワ（佤）族などにとり、狩猟は農耕や家畜飼育とともに重要な生業であった。一



写真1 野鶏用の籠をつくる（中国・雲南省のハニ族の村、撮影：秋道）

方、河川流域や盆地、平地に居住するタイ・ル  
ー族、ナシ（納西）族、イ（彝）族などにおけ  
る狩猟の比重は低い。また、ラオス北部やタイ  
北部には、雲南省と同様のチベット・ビルマ語  
系やタイ系の人びとに加え、カム族やラメット  
族のようなモン・クメール語系の人びとが居住  
している。

## 2 狩猟活動の実際

—タイ北部のメコン河支流・イン川上流域

タイ北部では、まず、どのような狩猟活動が  
行われているのであろうか？ 本節では、本地  
域の野生動物の中で狩猟対象として最も中心的  
位置を占める野鶏やけいとイノシシに注目する。タイ  
北部の事例ではあるが、本章が対象とする地域  
での狩猟の実際を理解するうえで有用である。

調査地は、タイ北部のパヤオ県内で、メコン  
河の支流であるイン川の支流域に位置してい  
る。支流域は、ラオスとタイの国境線から西に  
流れる川を中心に南から北に数本の沢がみられ  
る。ここでは、以下で紹介する狩猟活動が展開  
されている。

調査地の標高は約六〇〇〜一五〇〇メートル  
である。約九〇〇メートルの高度差がみられ

る。集落の周辺にうっそうとした森林が自生し  
ているが、村の大部分の土地は斜面にあり畑に  
なっている。村には、二十戸二十六世帯のヤオ  
（ミエン）の人びとが暮らしており、かつては  
焼畑農耕を中心とした、現在ではトウモロコシ  
を中心とした常畑農耕を営んでいる「増野 二  
〇〇五」。

村の周辺には数多くの野生動物が生息してお  
り、それらを対象にした狩猟が行われてきた。  
以下では、野鶏とイノシシを対象にした狩猟技  
術とその実際についてみていこう。

### 野鶏の技術と実際

調査村には、二〇〇六年三月下旬現在、野鶏  
を対象にした狩猟者が七名いる。二十歳代から  
三十歳代の村在住の男性である。狩猟方法は、  
笛かおとこ囿を使い獲物をおびき寄せて銃で撃つとい  
う人がほとんどである。たとえば、ある狩猟者  
の場合、同じ狩猟者から囿を借りて、囿猟をし  
ていることから、囿の貸し借りがみられること  
がわかる。村には、囿用のニワトリを飼育して  
いる人が五名ほどいるが、彼ら全員が狩猟の際  
にそれぞれの囿を使っているわけではない。ま  
た、一名のみ最近習得したという罾の使用者が  
いた。

聞き取り調査によって得られた次の事例か  
ら、囿猟の実際をみてみよう。

#### 【事例二】野鶏の銃猟

二〇〇六年三月二十五日

前日の道路工事の際に、野鶏の鳴く声を  
聞いた。このため翌日の早朝五時ごろに猟  
に出かける。笛を使ったら野鶏が寄ってき  
たので散弾銃（灰色の弾は小粒で自家製）  
で撃つ。なお、ここで使用した笛は、国内  
のナーン県ムーナン（ヤオ族の村で、妻の  
出身村）で購入したという。笛がよくない  
と野鶏は近づいてこないという。

この事例から、猟師は野鶏を探索してから猟  
をするというよりも、たまたまほかの仕事の際  
に野鶏の存在を確認したので、狩猟を行って  
いることがわかる。また、猟の時間帯は早朝であ  
り、他地域から購入した笛であっても猟の際に  
役立つことが理解できる。

まず、野鶏は、村人にとって農閑期である  
と同時に、野鶏の鳴き声を聞くことのできる繁  
殖期の二〜四月頃に実施される。また二〇〇六  
年二〜三月における野鶏の捕獲地点は、集落か  
ら北、西、南の方向に、約二キロメートル以内

に認められる。猟師の移動手段は、集落からすべて徒歩で行く場合とオートバイを部分的に使う場合とに分かれる。各猟師個別に特定の猟場（テリトリー）を持っているわけではない。前述したように、作業中に鳴き声を聞いたのをきっかけにして野鶏を捕獲した事例が多くみられる。

ここで、二〇〇六年二～三月における狩猟者ごとの狩猟法や捕獲数を示そう。まず、狩猟法は、前述したように笛を用いる方法が最も頻繁にみられる。次は、罠を使う猟であり、罠の利用は一名のみであった。また、一人当たりの野鶏の捕獲数は〇～八羽と狩猟者によって大きく異なっているが、一～三羽が多い。捕獲した野鶏は、オスが中心であるがメスの野鶏も含まれる。

獲物の解体は、捕獲場所より捕獲者の家の軒先で行われることが多い。しかし、解体する人が必ずしも捕獲者とは限らない。また、肉の分配は肉の量が少ないということもあって、家中で行われることが多い。

野鶏のすべての部位が調理に利用される。まず、羽をむしり、すぐに利用しない場合には冷蔵庫に入れる。次に、足のももや胸の生肉は、板の上で包丁でたたきミンチにする。その後、

葉を加えて火をとおす。骨は、湯通しして水を加え、トウガラシ、味の素などで味をつける。内臓は油で揚げる。最後に、ミンチ、骨、内臓を混ぜ合わせる。

### イノシシ猟の技術と実際

イノシシ猟の場合は、個人猟とともに集団猟が行われるために、村の成人男性のほとんどがその狩猟に関与する。集団猟の際には銃を保持する鉄砲撃ちと勢子とで役割が違う。たとえば、二〇〇六年三月二十六日午前の巻狩りの参加者は、十七人が村の人で、三人が村外の人であった。このうち十三人が銃を保有しており、七人が保有していなかった。村の人の中には一軒の家から二人参加している家が四軒あり、猟に全く参加しない家もみられた。村外の三人は、集落の近くに事務所のある森林局作業員であった。

狩猟技術は、季節によって変わるイノシシの生態に応じて異なっている。まず、イノシシが畑の収穫物を荒らす八～九月では、畑の中の待ち伏せ猟が行われる。調査地には、待ち伏せ台に二つのタイプが確認できた。畑に木を組んで待ち伏せ台を新たに建設するタイプと、木の上を待ち伏せ台にする場合とである（写真2）。

二つとも、畑や森と畑の境界に位置する。猟は、前述した野鶏猟と同様に、農閑期となる一～四月に行われる。イノシシの出産が多い三月頃は、獲物の足跡を追跡する個人猟と、獲物が逃げ込んだ森を十数人で囲い込む集団猟が行われる。また、二～三人で、イノシシのみを対象にするものではないが、集落から数キロメートル



写真2 待ち伏せ台。畑に木を組んでつくられる（タイ・ヤオ族、撮影：池谷）

ル以上離れたところへ遠征に行くこともある。この場合には、野外で二〜三泊する。

以下では個人猟と集団猟の詳細を述べよう。まず、集落周辺の猟場は国有地なので特定の人々の独占的な利用は認められていない。誰もが、自由に猟を行ってもよい。ただ、待ち伏せをする待ち伏せ台は、造ったものが独占的に利用している。

### 【事例二】足跡追跡猟

二〇〇六年三月二十六日（直接観察）

筆者（池谷）は、イ氏の狩猟に同行する。一匹の犬もいっしょである。彼の持ち物は、銃のほかには山刀、バッグ、笛などである。まず、午前五時十三分、彼は徒歩で出発する。五時三十分車道から右に入る。五時三十七分、立ち止まる。野鶏の声は聞こえないという。犬も来ている。五時五十二分、イノシシの足跡を見る。あたりは明るくなる。六時に笛を吹くが野鶏がいのような気配はない。イノシシの足跡を読む。六時十分、イノシシの足跡を読む。通行を妨害する木を切るために山刀を使う。六時二十二分、立ち止まり、笛を吹く。六時三十分、野鶏が鳴かないので、どうにも

ならないという。六時三十七分、竹林あり。六時四十六分、やぶこぎをして、見張り台をみつける。ここには、サンパラン（栽培イモの根）があり。ここで、かつて二頭のイノシシを捕獲したという。七時二分、ハチの巣を見つけ、ハチの子を食用にするためにそれをバッグに入れる。遠くのほうで、野鶏の鳴き声が聞こえる。七時十八分、道路に出る。七時四十五分に村に着く。

以上のような【事例二】から、次の点が明らかになった。集落から猟場までは、徒歩で約二十五分を費やす。猟場は、かつて焼畑が行われていたところであるといわれるが、途中で、イノシシの足跡を見つけたので、そちらを追跡するためにやぶこぎをする。猟には犬が使われており、犬は猟師の先を歩いていた。また、サンパランはイノシシを待ち伏せするために、彼が植えたものである。一方で、集団猟としての「巻狩り猟」の実際は、以下のとおりである。

### 【事例三】巻狩り

二〇〇六年三月二十六日

今回は、X氏がイノシシの足跡を見たことが集団猟のきっかけになっている。巻狩りの通達がすばやく各家にまわった。三月二十六日の第一回目の狩猟は、おおよそ一〇時三〇分から一四時頃にかけて行われた。参加者は、二十一名であった。猟では、幼獣一頭と成獣一頭を捕獲した。幼獣を先に地点Aで捕獲したが、成獣は地点Aの包囲網を突破した。包囲網における勢子と勢子との距離は、約五〜八メートル、完成までは静かにする。そして、やぶの中からイノシシを追い出すために「オーイ、オーイ」と勢子が声を出す。その後、仕留めたイノシシは、畑の出作り小屋で解体した。この出作り小屋を使ったのは、水が利用できたためである。

以上の事例から、次のことが明らかになる。巻狩りの際に行われるイノシシの包囲網がつくられても、イノシシは簡単にそれを突破することができる。また、これらの狩猟活動は、標高差で約三十メートルある山の斜面を利用して行われるものである。



写真3 捕獲されたイノシシ (タイ・ヤオ族、撮影：池谷)

巻狩りにおける肉の分配事例をみてみよう(写真3)。まず初めに、イノシシを最初に撃つた人がイノシシの頭部と膝より下の脚の部分を手に入れた。これらの部分は儀礼に必要とされる部分である。残りの部分を、二十三等分して、S氏とK氏がそれぞれ二／二十三を手に入れて、それ以外の参加者はそれぞれ一／二十三(約二キログラム)ずつ手に入れた。なお、銃

を借りたお礼として、K氏は自分の取り分(四キログラムと推定)から約一キログラムの肉を、銃の持ち主に分配した。このように、集団猟の際には、肉の分配方法に一定のルールがみられることがわかる。

以上のように、この節では、タイ北部におけるヤオ族の村の事例から、野鶏やイノシシを対象にした狩猟活動の実際を明らかにした。これは、メコン河支流のイン川上流域での事例にすぎないが、調査地全体の狩猟活動の実際を理解するうえで有用であろう。

### 3 狩猟技術と儀礼

—ラオス北部のメコン河中流域

ラオス北部の焼畑農耕民もまた、狩猟と深く関わっている。それは、焼畑農耕そのものが野生動物の生息地と隣り合わせに行われていることと関係する。つまり、焼畑農耕民にとって野生動物は焼畑の作物に対する害獣・害鳥として登場する。焼畑農耕民はそれを排除しようとする。その端的な行為が狩猟である。ただし注意深く見ると、狩猟は単に害獣・害鳥駆除だけを目的とした行為ではないことがわかる。それは稲作儀礼の中にも野生動物と深い関わりを示す

語りがあることによっても裏づけられる。

本節では、ラオス北部に見られる豊かな狩猟形態と作物の豊作を祈願するための犠牲獣を獲得することを目的とする集団狩猟もみられる。ここでは、それらに触れながら、ラオス北部の焼畑民の狩猟儀礼についても述べる。

#### 野鶏猟の技術(呼び笛と囿)

呼び笛は、いしゆみ 鴛、猟銃、罟などを用いた狩猟と組み合わせ用いられる。代表的な呼び笛が、赤色野鶏のオスの鳴き声に似せて作られた呼び笛である。

ルアンパンバン県ムアンゴイ郡ドウン村(カム族)では、この笛のことを「コントー・イヤル・ブリー」(真似る・鶏・森)と呼んでいる。チョイという竹の節部を挟んで上下に共鳴体として筒を残し、節の上側に二つないしはひとつの窓を開け、竹のストローで息を吹き込む笛である。この笛には二つの使用方法がある。ひとつは、野鶏が通ると推定される所の両脇に垣根を作り、わずかに開けた通り道にくくり罟の締め輪を下げ、手前側の茂みに隠れて呼び笛を吹く。笛の音を聞いた雄は、一目散に走り寄ってきて罟に掛かる。二つ目は、罟場の中央に囿の雄鶏を繋ぎ、周りにくくり罟の締め輪を張り巡



らし、茂みに隠れて笛を吹く。雌がいると思つた囹はけたたましい鳴き声を上げる。それを聞いた野鷄は、縄張りを荒らされたと思ひ、囹に向かつて突進してきて、罾に掛かるといふものである。

囹の雄鷄は、野鷄の雄と家禽の雌鷄との交配によつて得る。ルアンパン県ナムバック郡シームンフン村(タイ・ルー族)では、焼畑作業の期間に家で飼つている発情した雌の鷄を畑に出して、野鷄の雄と交配させて卵を産ませ、家に持ち帰つて家の雌鷄に抱かせて孵化させる。こうしてできた雄鷄を囹にする。囹は、「カイ・スア」(鷄・野生の血が混じつてゐる)と呼び、

ソンと呼ぶ竹籠に入れて狩りに持つていく。

呼び笛は、元来、モン族が使用していたといわれるが、現在ではアカ族、カム族、タイ・ルー族、タイ・ダム族などの多くの民族が用いてゐる。材料が竹から軍用銃の薬莖(やつきょう)に変わり、最近ではブリキ製のものも市場で売られてゐる。

また、ウドムサイ県ムアンガーン郡テイーンタイ村(タイ・ルー族)では、「マツチヨロイ・ノック」(真似る・野鳥)という呼び笛が用いられる。この笛には、ココヤシの殻に穴を開けて吹竹を付けたもの、竹筒の片方に蓋をし、中

に鉄砲の玉を入れ、片方に吹口を付けた蓋をしたもの、細い竹の節の両側にわたつて切り込みを入れ、吹くほうの側に糸を巻きながら音を調整したもの、の三種類がある。これは、雌雄両方の鳴き声が真似できる。さらに、モン族の間では、シカやイノシシを呼ぶ際に木の葉を唇に当てて吹く柴笛がある。

#### イノシシ猟の技術(罾と落とし穴と銃)

ルアンパン県ムアンゴイ郡ドウン村(カム族)では、実りの時期の焼畑に稲を食べに出てくるイノシシを対象にした三つの罾猟がある。ひとつは、イノシシの通り道に直交する方向に穴を掘り、その上に板を渡し、周りに撥ね木に繋いだくりり縄を回す方法である。イノシシが板を踏み落とすと、撥ね木の留めた爪が外れ、足をくりり跳ね上げる。ブレオ・スワン・ブリツ(足くりり罾・イノシシ・森)という。穴の手前に丸竹を一本置けば、イノシシはそれを飛び越そうとして穴に足を突っ込むという。もうひとつは、イノシシの通り道と直交する方向に、撥ね木に繋いだくりり縄を、猪首の高さに張り直し、地面に立てた割竹の節の突起部に撥ね木を引っかけて留める方法である。イノシシが首を突っ込んでくりり縄を引くと、撥ね木の

留めが外れ吊り上げる。プラヨツ・スワン・ブリツ(首くりり罾・猪・森)と呼ばれるもので、イノシシの大きさによつてくりり縄の高さを調節する。

残りのひとつは、二本の立木へ交互に丸竹を差し渡し撥ね木とし、それと直交するように渡された支え木に竹の爪で留め、撥ね木の先に直交するように竹槍を添え、留め爪から延ばした紐をイノシシの通り道に張り渡す方法である。イノシシが紐に引つ掛かると、留め爪が外れ、竹槍がイノシシを突き刺す仕掛け銃という(写真4)。イノシシの体高に合わせて撥ね木と槍の高さを調節する。これは、一九六〇年代のラオス内戦でも武器として利用したという。この仕掛け銃の罾は、ルアンナムタム郡サムソン村(カム族)では、ハオーと呼ばれてゐる。

ドウン村では、イノシシは「若い森」に棲んでおり「年を取つた森」にはいないと言ひ、若い森から畑に入つてくる通り道に罾を仕掛け

る。先に示したサムソン村(カム族)では、稲が実る時期にトウ(窪み)という名称の、イノシシを捕獲する落とし穴式の罾を仕掛ける(写真5)。まずイノシシが侵入する焼畑の脇に、並

行方向の幅が一メートル、直交方向幅が一ヒロと肩肘の長さ、深さが脇の下までの高さの穴を掘る。底を袋状に掘り広げ、サラツと呼ぶ竹の槍を数本上向きに差し立てる。その上に偽装のための草木をおく。通りかかったイノシシは穴に落ちて、サラツに突き刺さる。

ウドムサイ県ムアンフン郡プウラット村（カム族）では、かつて、村人全員が参加して行うヨツ・オン・スワン・ルアン（一緒にイノシシ狩りに行く）という集団狩猟を行っていた。その時期は雨季の七月の頃で、乾季にはイノシシの足跡がわかりにくいので行わない。皆



写真4 罾（ラオス・カム族、撮影：川野）

で森に出掛けて、コン・クエツ（足跡を調査する人）と呼ばれる一人か二人が、チャツノン・スワン（イノシシの通る道）を見ながらイノシシがいるかどうか調べて、イノシシが出てくるようなところに鉄砲を持ったコン・コ・ピン（待つて射る人）を配置する。鉄砲を持たない村人たちがコン・オール（叫ぶ人）となつて、チャツノン・スワンの方向にイノシシを追い立てて行く。一回で三頭から四頭が獲れる。獲れたイノシシは森の中で解体し、射止めた人は頭と後脚を、残りは全員に分配する。ルアンナム

タ県ナムター郡サムソン村（カム族）でも、竹



写真5 落とし穴式の罾（ラオス・カム族、撮影：川野）

の先に鋏やじりを付けた槍で刺すヨックワールという同様の集団狩猟を、十一月から十二月の時期に行っていた。

獲物を射止めた場所には、イノシシの舌と耳を少し切り取って土の中に埋めて、そこにいるロイ・パテツ（土の霊）に食べさせる。また、森から村に肉を持って帰るとき、三叉路に出くわしたら肉を少し供える。そうしないと、霊が村に入ってきて子どもたちを死なせたりするといふ。この習慣は、現在も行われている。

射止めた人の家では、頭、内臓、肉を少しずつ掛け、竹紐の肉などの料理を少しずつお供えて、「これからも獲物が獲れますように」と、鉄砲に向かつてお願する。射止めた人がまず食べてから、その後皆で共食する。

#### 焼畑の稲作儀礼と野生動物

焼畑では、畑地の選定・伐採から始まり、播種、除草、収穫と作業が続く。各作業の節目には野生動物に深く関与した言い伝えがある。ここでは、各作業段階に分けて、それらの詳細を述べよう。カム族が事例の

中心であるが、タイ・ルー族やラメット族などの事例をも取り上げる。

人びとは焼畑を伐り拓こうとするとき、しばしばそこにいる霊の意思を窺うが、その意思が野生動物の姿をもって提示され、その決定に重要な位置を占めることが多い。

たとえば、ルアンパンバン県ムアンゴイ郡ドゥン村（カム族）では、まず、伐り拓こうとする森に行つて、砥石を置き、カイガラシの巣とトウガラシを燃やして、そこにいる霊に立ち退いてもらう。しかし、このときに、ハチの巣を見たり、野生動物（シカ）を見たり鳴き声を聞いたりしたら、ただちに止める。なぜなら、ハチの巣は、葬式でお棺を担いだ形をしており、野生動物（シカ）は森の霊の使いとして「ここを畑にはならない」ということを告げに来ているからである。それを無視して畑にすると人びとが病気になるったり、死んだりするので、今でも絶対に遵守する。

ルアンナムタ県ナーレー郡サリアンパン村（ラメット族）は、選定した畑の予定地に行く途中に、ポイ（シカ）やエブレット（野鶏）を見たら、それは、森の霊がその場所を畑にしてはならないという意味表示をしたのだと語る。

ルアンナムタ県ナムター郡サムソン村（カム

族）では、自分が気に入った場所を決めて、畑にしてよいか否かを占うリヤップ・ハレット（確認調査・畑）をする。まず、伐り拓いた場所の中央の地面で火を起こし、トウガラシとカイガラシの巣を燃やして霊を追い出し、「ここで焼畑をします。稲もトウモロコシもよく実り、人も病気になるないように」と祈つて家に帰つて夢を見る。ご飯を食べている夢を見たら、家族の誰かに心の苦しみが起こる徴であり、稲がネズミやイノシシにやられる徴なので、その森を伐つてはならないと語る。

これらの語りの意味は、野生動物が焼畑農耕の対立項として設定されているということであろう。しかも、人間は現実の野生動物との対立を一方的に忌避していることが理解できる。

ルアンナムタ県ナーレー郡トントン村（カム族）では、森林を焼いて三週間経つと種播きをする。種播きを始める前に、男主人が畑に播くそれぞれの種類の種粉を、チヨオ（作小屋…収穫時の畑の米倉）の「聖なる畑」に儀礼的に播く。そのとき、家から持ってきた生卵を一個割つて、チヨオで蒸し焼きにし、ご飯と一緒に少しずつ播く種粉に食べさせる。さらに、卵の殻を小さく割つて畑に播く種粉に触れさせた後に、ユアン・ハレット（畑の下側縁）の出入り口

の外側に投げ捨てる。卵の殻を畑の出入り口の外でイノシシに食わせて、もてなしてお引き取りを願おうというのである。それからユアン・ハレットのあたりは水分が多いので、それを好む早稲種を播く。イノシシは畑の下側から一番早く入ってくるので、早生（稲）種を植えておけば、イノシシが畑に入る前に収穫できるからだという。つまり、ここにも焼畑農耕民とイノシシとの対立が見られるが、イノシシとの現実的な対立、遭遇を調和的に解決しようとする考え方が息づいている。

ルアンナムタ県ナムバック郡コクナン村（タイ・ルー族）では、種を播いて二カ月経ち、稲の背丈が人の膝の高さぐらいになったころ、稲の成育促進儀礼を行う。この儀礼には、次のような伝承がある。

昔、タイ・ルーは米作りをしていなかった。パーマイ・ヒーマバーン（森・豊かな野生）という山の中に、直径が七拳の粒の大きな稲の穂があって、収穫の時期にラオカオ（米倉）をきれいに掃除して、鐘をポーと叩くと、羽が飛んできてラオカオは独りでにいっぱいなるものであった。ところが、あるとき、寡婦のメーマイという

おばさんが、一人での作業であるため手間取り、ラオカオが完成しないうちに手に持っていた棒が鐘に触れてしまった。他の家のラオカオは粉を迎える準備が終わっていたのでラオカオは粉でいっぱいになった。

しかし、おばさんのラオカオは準備が終わっていないかったため、飛んできた粉は外に溜まっていた。おばさんは、悔しさの余り怒って棒でその粉を叩いたところ、現在のように小さな粒に割れて、村の全部の粉が川や森に飛んでいってしまった。森に逃げた粉は野鶏が保管した。また、川に逃げた粉はパシウウという種類のナンタロタラーンという名前の雌の魚が、ナン・クワ・ソツ（くさん・お手伝い・ソツ）と命名して保管した。それ以後、タイ・ルーの村から粉がなくなってしまった。

ところが、十万年後、あるお金持ちの女性が、川に魚取りに行つたところ、パーカンという種類の雄の魚を捕まえた。パシウウは「恋人を捕られたら困るのでパーカンを助けてください。その代わり、稲を差し上げますのでパーカンを返してください」とお願いをした。女性がパーカンを返すと稲をくれた。その時からタイ・ルーは再び

稲を手に入れ、稲作を始めることができた。だから、ホンカオヘツの儀式にガイ・メイ・ウーン・カオ（鶏・雌・抱く・稲）と呼ばれる鶏とパーカン、パシウウの二種類の魚を供える。

ルアンパバン県ムアンゴイ郡ダウン村（カム族）でも、陸稲とゴツ・イヤルー（稲・野鶏）との関係が語られている。

昔、ある村にコンロック（親が亡くなった少年）がいた。彼は、だんだん貧乏になつていき、焼畑がやりたいと思つたが、焼畑の道具も何も持っていない。彼は、父母のお墓の近くで休憩する人たちから道具を借りて、ある程度の広さの森を伐り拓いて焼いたが播く種粉がなかった。

ある日、コンロックはモ（台付き弓）を持つて森に鳥を撃ちに行き、トゥンプルーという鳥を撃ち取つた。料理をするために解体したら、胃袋の中に三粒の粉が入つていた。コンロックはその粉を種粉にして畑に播いた。稲は順調に育つて穂が出て熟れて収穫ができるようになった。彼が手に入れた三粒の稲は、トゥンプルーの胃から出

てきたので、ゴツ・イヤルーと呼ぶようになった。トゥンプルーとイヤルーとは同じ鳥である。その後、コンロックはコン・プラヨンという野生の鶏の姉妹と結婚して豊かになった。

以上の神話は、赤色野鶏が稲を抱き、保管する、稲の母性的な存在であることと、赤色野鶏が陸稲を食べる存在であるという両義的な存在であることを語っている。

ラオス北部の焼畑農耕民の間には、稲が豊作になるように陸稲の成育を促進させることを目的とする儀礼があり、その時に村人による集団狩猟が行われる。

たとえば、ウドムサイ県ムアンサイ郡ホイフンム村（カム族）では、稲が実る前の九月頃に、「ブンマ・ロイ・ムアン」という儀礼を行う。午前中に、プロヌイカット（門）を、コンボン・グン（村の頭の意で、聖なる森の方向にある村の入り口）と、フタ・グン（村の尻の意で畑への道の入り口）の二カ所に建てる。この門が建てられたら、村外の人は村に入れなくなる。儀礼は、カム暦の一週間（十日）の第一日目に、モック・モー・チャーという聖なる森の中にいるカン・ロイ・ムアン（村の霊の家）の

前で、黒い豚を殺し、その生血を霊の家に付け、調理をしてご飯と一緒に霊の家の柱に供え、「悪い霊が村に入らないように、村人が健康でありますように、家畜が死なないように、稲をよく実らせてください」とお願いする。

二日目は、ブック スック ブック (羽根つき) やルーチャム (綱引き) を行う。綱引きでは、男性と女性に分かれてプロン (籐の蔓) を引く。女性側が勝つと稲の収穫が豊かになり、男性が勝つとあまりよくないという。

三日目には、村人全員でヨ・クワン・トウ (野生動物を狩りに行く) のために森へ出掛け、獲物は、村に持ち帰り、村人全員で分配し、頭はラクーンの家で調理し、全員で食べる。四日目は、ラクーンの家周りの草取りをする。

なお、ルアンナムタ県ムアンシン郡パイヤロアン村 (アカ族) では、焼畑の種播きを始める前にウネネオ (新しい年の祭) を行うが、その二日目に青年たちが、鉄砲を持って集団で山に猟に出掛ける習俗がある。しかし、現在のとこその詳細な方法や目的については、把握できていない。

## 4 狩猟文化の地域間比較

— 中国・雲南省とラオスやタイでの狩猟との比較

ここでは、これまでのタイ北部の狩猟活動の実際やラオス北部での狩猟技術や儀礼の多様性をふまえて、雲南省の狩猟技術や信仰の事例を加えることで、前述したタイ北部やラオスにおける狩猟文化との地域間比較を試みる。

### 狩猟時期と狩猟具としての弩

雲南省の狩猟はいつでも行われるわけではない。野生動物の餌となる木の実や果実が少なくなる冬から春にかけての時期、渡り鳥の移動時期、その逆に田畑の作物が実り、素餌のために動物が接近する時期などが猟期となった。雲南省西・南部では、かつて焼畑 (刀耕火種) がさかんに行われていた「尹 二〇〇〇」。焼畑の作付サイクルは狩猟の対象や時期と密接に関連する。森林伐採により新しく草本が芽生え、シカ、イノシシなどが素餌にくる。火入れは、地中の小動物や野鶏を獲る機会となる。焼けた土地には昆虫の死骸をねらう野鶏がうろつき、焼けた植物をシカが好んで食する。播種した作物の収穫時期には大型の動物が作物を求めてやっ

てくる。また、シカが人尿を好んで舐めるため、尿を土とまぜたものをシカ寄せに使う工夫もなされた。

また、タイ北部とラオス北部の狩猟時期を比較してみると、イノシシの集団猟の時期に違いが認められた。タイのヤオ族では乾季に行われていたが、ラオスのカム族では雨季に実施されるものであるという。違いの要因については明らかにされていない。

さて、雲南省の焼畑農耕民は、弓、弩、鉄砲、やり、罨、落とし穴など多様な道具による狩猟を行うことが知られている「羅 一九九六・徐 一九九九」(写真6)。弓は矢ではなく土製の弾を射る弾弓<sup>①</sup>であり、鳥類、小型哺乳類を捕獲するためのものである。弾弓は雲南省西部・南部のタイ族、ジンポー族、ディアン (徳昂) 族、アチャン (阿昌) 族、プーラン (布朗) 族、チノー族で一般的に用いられる。

矢をもちいた弓が弩であり、雲南省の少数民族では広く分布する。特に、山地居住のリス族、ラフ族の社会では弩は伝統的に重要な狩猟具である。弩にはいろいろな形式があり、弩に毒矢が使われることがある<sup>②</sup>。

これらの中で、前節までにその詳細を述べてこなかったのが、弩の利用である。ラオスにお

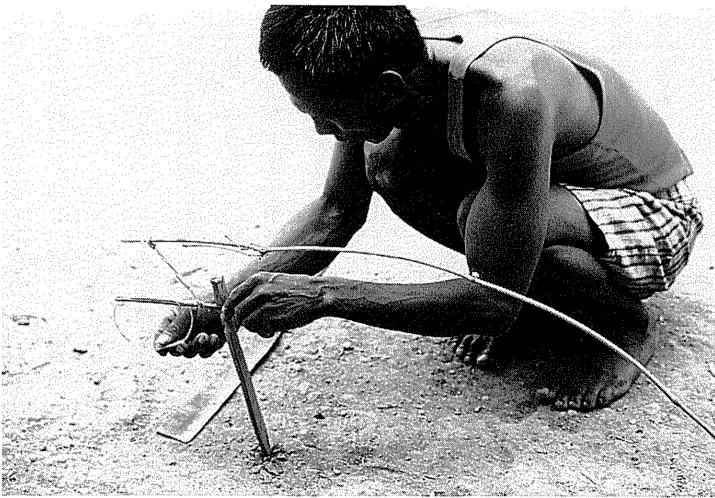


写真6 野鶏用の括り罠（中国・雲南省のチノ族の村、撮影：秋道）

いても、民族を超えて伝統的に用いられてきた、飛び道具としての狩猟具は、台付き弩弓である。呼び方は、「モ」（カム族）、「カ」（ムシユダー族、クイ族）、「ナー」（タイ・ダム族）、「ナー」（モン族）など、民族ごとに異なるが、形態はきわめて画一的である。弓は竹製、木製のいずれかであり、台木の前部に貫通させ

てある。弦は蔓性の樹皮を撚り合わせ、両端に取り付けられているが、使用しないときには片方を外しておく。使用するときには弦を絞って、台木の後方に設けた窪みに引っ掛け、台木に彫られた溝に矢を番え、台木に取り付けた薄板で下から押し上げて弦を外し、矢を飛ばす。溝の先端部に付けられているカイガラムシの巣で作った接着材で、矢の照準を調整する。台木の威力は弓の大きさにもよるが、弓の長さが五十七センチメートルぐらいの標準的なものでも、照準距離は二十メートルぐらいある。イノシシからシカ、野鳥まで撃ち獲ることができるといふ。弩は、背中の竹製の矢筒や腰の山刀とともに、罠に出掛ける場合だけでなく、焼畑作業などのために山に出掛ける男性たちの肩に常に掛けられていると言ってよい。彼らは、獲物と遭遇した時、あるいは獲物を探索、呼び笛によって誘い出して、この弩を使って撃ち取るのである。

#### 狩猟方法の地域性

雲南省では、銃猟、罠猟、畏猟、鷹狩り、落とし穴、オシなどの多様な狩猟法が知られている。銃が雲南省に導入されたのは二十世紀中頃のこととされており、その後、少数民族の間で

広く利用されてきた。銃には地域ごとにいくつもの種類がある。

罠の鳥（媒鳥）を用いて獲物をおびき寄せる罠猟は、イ族、ミャオ（苗）族、リス族、ペー（白）族などで知られている。罠に接近する獲物は、鉄砲、弩、畏などで捕獲される。畏（捕机）には、さまざまな種類の「くくり畏」と「はね畏」があり、地上、樹上、巣穴の入り口などに設置される。収穫期の田畑周辺には、鳥が季節に応じて好んで採食する木の実や果実を餌として畏が設置される。

ナシ族はハヤブサによる鷹狩りを秋に行う。冬と春に移動する渡り鳥を二本の棒の間に張ったかすみ網で捕る罠がプミ（普米）族、ペー族の間で行われる。また、とりもちを竹棹の先につけて樹上の鳥を捕る方法があり、桐油と松や（松香）（イ族）、イチジクの樹液（プーラン族）、木の根から出る液（プーラン族）、ウルシや板栗につくカイガラムシのラック（リス族）などがとりもちとして使われた。

落とし穴はプーラン族の例のように、深さ二メートル、長さ一・五メートルの穴を掘り、地面にとがった竹を突き刺しておき、落とし穴の周囲においた容器に酒を入れ、飲みに来た馬鹿（おろ）や鹿を穴に落とし捕獲する方法がある。特

に落とし穴は作物の収穫期に有効な方法として  
さかんに利用された「尹 二〇〇〇」。

また、オシ(チノー族、プーラン族、ハニ族)によりクマやトラを捕獲する猟法や餌をとりに来る小動物を重石で押しとる猟(ヌー族、リス族、ラフ族)、笛でシカをおびき寄せる方法(ジンポー族)や野鶏に竹製の呼び笛アペイを使うことがあった(チノー族)「秋道 二〇〇五b」。イヌを使った追い込み猟(リス族)もある。このように、野ネズミや小型鳥類から大型獣までを捕獲する多様な狩猟方法が利用されてきた。

以上のような狩猟法は、前述した弩と同様に、ほかの地域での狩猟技術を比較するうえで興味深い点を提供する。まず、これまでの記述をみると、銃猟、罠猟、畏猟などは三地域で共通するのであるが、落とし穴はラオスの事例と共通して、鷹狩りとオシは雲南省のみ、みられたものである。このように、三地域間での狩猟法の共通性と違いは、民族の違いに整理してまとめることができるであろう。

## 信仰と儀礼

雲南省の焼畑農耕民は狩猟技術とともに、狩猟についての独特の信仰・観念や儀礼をもって

おり、ヤオ(瑤)族、トゥールン族、チノー族、ラフ族、リス族、アシャン族、ワ族、ハニ族、イ族などで広く知られている「徐 一九九九」。

曲靖地区のイ族は、狩猟の神と山の神を同一視している。長老が祈禱をあげ、豊猟を祈願する。儀礼の後の宴会で模倣的な狩猟を実演する。ハニ族の一支族である僂尼族は、野生動物の主は山の水の神であると考えている。ハニ族もクマ、シカ、イノシシ、岩羊のような大物を捕獲した場合、狩猟の神に感謝を捧げる儀礼を行い、共食する。頭骨は狩猟者の記録として保存される。トゥールン族は、集団的な狩猟を行うさいに、はぎ取った木の樹皮に動物の凶像を書き、三十〜四十メートルの距離から弓矢を射て、命中した動物を獲る「羅 一九九六」。

チノー族の場合、主要な野生動物を管理する三神がいると信じられている。野生動物は、地面を四脚で歩くソ(sō)・麂、馬鹿、クマ、オオカミ、ヒョウ、ヤギユウ、ゾウなど、四脚で樹上を爬行できるホ(hō)・タケネズミ、リス、ノネコ、センザンコウ、猴、ハクビシンなど、二脚で空中を飛ぶことのできるガ(g)・クジャク、サイチョウ、ハト、オウム、カモ、タカ、野鶏など)に分類される。ソ、ホ、

ガそれぞれを管理する神がいる。興味あることに、野生動物全体は、ソホガ(sohoga)すなわち、前記の三つの動物群の総称と表されている「羅 一九九六・刘、白 一九九九・秋道 二〇〇五b」。狩猟獣のうち、野牛が捕獲された際に山の神に豊猟を感謝する最も盛大な儀式が行われ、ついで、馬鹿、さらに鹿の順に儀礼の重要性は減じる。

以上のように、狩猟の成功を祈願するとともに、猟の成功を感謝し、その肉を共食する習慣が少数民族の間で広く見られる。特に、狩猟の神は山の神と同一視されていることが多く、祭祀を執り行う専門の宗教的な職能者が知られている。

## 5 狩猟の変容とその要因

— 中国・雲南省のメコン河上流域

現在、本章の対象地域であるメコン河の上流・中流域において狩猟は経済的にはマイナーな位置を占めるだけになってしまった。これには、一九九八年の長江下流部における大洪水の反省から、中国で天然林の伐採が全国的に禁止され、翌一九九九年以降、銃の取り上げを含み、狩猟が全面的に禁止となった背景がある。

タイにおいては、一九九八年前後から保護林内の狩猟は禁じられており、一九九八年の長江下流部の事情と類似している。

ここでは、雲南省の事例に焦点を当てること、狩猟の変容とその背後にある要因をみてみよう。なお、雲南省では、環境保護政策が施行される二十世紀末前に狩猟が大きく後退した。その背景にはさまざまな人為的な要因が関与している。

### 換金目的の乱獲

雲南省の山地居住の諸民族がさかんに狩猟を行ってきた大きな理由は、自給用の食料や生活用品の獲得とともに、換金性の高い狩猟獣を獲得するためであった。たとえば、「麝香出永昌及南詔諸山、土人皆以交換貨幣」（蛮書卷八・蛮夷風俗第八）とあるように、すでに唐代から麝香が重要な換金物とされていた。時代は下るが、二十世紀前半、雲南省西北部の中部地方では、クマ、シカ、ヒョウ、オオカミ、山驢（野生のロバ）、ホエジカ、キツネ、サルなどがリス族、イ族やミャオ族の得意とする狩猟獣であることが書かれている〔雲南省中甸県誌 一九三二〕。これらの動物の中で、麝香や鹿角とともに、山驢、岩羊 (*Pseudis nayaur*) などの

皮が売買されていた。

リス族の調査を行った何大勇によると、維西地域では黒熊 (*Selenarctos tibetanus*)、林麝 (*Moschus berezovskii*)、馬麝 (*Moschus sifanicus*)、麝 (*Moschus moschiferus*) の換金率が高いという〔何 二〇〇五〕。雲南西北部では、二十世紀初頭から迪慶州が麝香の集散地となっており、麝香の買付価格は一九五〇年には一〇〇グラム当たり九・五七元であったが、一九五五年には二十五・三元、一九七九―一九八五年には九十元と飛躍的に上がっている。迪慶州における麝皮の取引数は一九三〇年代から激減しており、乱獲の兆候があった。

一方、雲南省南部の亜熱帯地域でも、同様な乱獲傾向が見られる。シブソンパンナー（西双版纳傣族自治州）では、山地居住のハニ族、チノール族、プーラン族などが狩猟を行ってきた。熱帯雨林や亜熱帯モンスーン林に約八十五種類の動物が生息する。この中には大型のアジアゾウ、インド野牛、金銭豹、トラ、黒熊、蘇門答臘などととも、白頬長臂猿 (*Hyllobates leucogenys*)、センザンコウ (*Manis pentadactyla*)、麝、シヴェット・キヤットなどの多数の中小動物が含まれる〔鄧 一九九七〕。チノール族は、キョン、リス、ハクビシン、野鶏、イノシシ

〔阿部 二〇〇二〕、タケネズミ (*Rhizomys pruinosus*) を自給用の食料としている。また、チノールの人びとは清朝時代よりタイ族土司への贈答品としてタケネズミなどの野生動物を献納してきた〔景洪県地方志編纂委員会 二〇〇〇：一〇五一〕。

シブソンパンナーのチノール族の村の中で最も海拔高度の高い約二二〇〇メートルの亜諾村に住む熟練猟師によると、年間の捕獲動物数は二〇〇キログラム前後（一九八〇年）から、一〇〇キログラム（一九八五年）、六十キログラム（一九九〇年）と激減した。同年別の猟師は三十キログラムしか獲物がなかったという〔鄧 一九九七〕。狩猟圧は確実に生物多様性を減少させている〔王 一九九七〕。

### 森林の減少

シブソンパンナーでは、中華人民共和国成立後、一九五〇年代は六十%であった森林被覆率が一九九〇年代後半には三十%と激減した。これと並行して、西双版纳の人口密度は一九四九年の十・四人/平方キロメートルから一九九二年には四十一・四人と急増した。焼畑も森林を一時的にせよ破壊する要因であったが、さらに拍車をかけたのが、国家政策による換金作物の



導入である。次にあげる例は、国家政策の浸透が、地域の狩猟文化を停滞ないし衰退に導くことを示唆している。

### 換金作物栽培の導入

一九五〇年代以降政府はシブソンパンナー帯で森林を伐採してゴム林やサトウキビ畑に改変する政策を進めた「尹、深尾 二〇〇四」。森林は単作のゴム林になり、遅れて導入されたサトウキビも全山に植栽された。その結果、森林が減少したために、狩猟が衰退した。たとえば、シブソンパンナーの盆地に住むタイ・ル一族の社会では、ゴム栽培のはじまる一九五八年以前にはたくさんの野鶏を捕獲することができたが、ゴム栽培の導入後、野鶏は姿を消したという。

### 住民の対応

中国では、銃による野生生物の捕獲は一九九八年以降いっさい禁止されている。銃も没収され、それまで住民が営んできた狩猟活動が事実上、禁止された「秋道 二〇〇二」。伝統的な狩猟活動を継承するべく、人びとはどのように対処したのだろうか。たとえば、海拔一六〇〇〜三〇〇〇メートルの山地に居住するリス族は

狩猟の禁止により弩を狩りに使う機会をなくしたが、その技術伝承のために弩の競技大会を行うようになった「何 二〇〇三」。

シブソンパンナーでは、一九九〇年代前半からは外部商人がチョウの買取事業を村に持ち込み、チノ一族の多くの村にあつと言う間に伝播した。しかし、二〇〇〇年あたり以降はチョウの採集を規制する動きがあつたため、買付商人が村に来なくなつた。しかし、いまなお、小規模ではあるが、チョウ採集が行われている「野中、秋道 二〇〇〇・秋道 二〇〇二」。

## 6 メコン河の中流・上流域の 変わりゆく狩猟文化

本章では、メコン河の中流・上流域における①狩猟活動の実際、②狩猟技術と儀礼、③狩猟の変容とその要因を把握することをねらいとした。対象地域は、タイ北部、ラオス北部、中国の雲南省を包摂している。これまで、これらの地域では多様な狩猟技術が展開してきたが、近年国家による狩猟規制などにより狩猟文化はますます変容しており、地域によっては狩猟が消滅の危機に直面している。

### 狩猟活動の実際

対象地域においては、さまざまな動物を対象にした狩猟が行われてきたが、野鶏とイノシシは三地域に共通していた。タイ北部のミエン（ヤオ）の人びとが暮らす山村の、野鶏狩では、笛か囀を使い獲物をおびき寄せた際に銃で撃つというのが一般的であつた。村内で使用されている銃は、散弾銃が中心である。ある年における野鶏の捕獲地点は、集落から約二キロメートル以内に認められる。猟師は、自分の畑での農作業の際に、野鶏の鳴き声を聞いたことをきっかけにして捕獲していた。捕獲した野鶏は、オスが中心ではあるがメスの野鶏も含まれていた。

イノシシについては、村に狩猟を得意とする者がいて、狩猟方法は、待ち伏せか足跡の追跡による個人猟か、巻狩りによる集団猟による。追跡猟には犬が使われている。イノシシを待ち伏せする待ち伏せ台は、畑の中か畑と森の境界につくられる。かつて焼畑が行われていた場所でイノシシの足跡を見つけたことが多く、猟師はやぶごぎをしながら追跡する場合が多い。

このように、狩猟活動は、野生動物の生態に  
応じて、狩猟時期や狩猟法が選ばれている。

## 狩猟技術と儀礼

狩猟は、生業としての活動であり狩猟技術に支えられたものであるが、同時に儀礼と密接な関係を持っている。

ラオス北部の焼畑農耕民の狩猟は、対象の野生動物が彼らの持つ稲作の神話に豊かに物語られており、赤色野鶏に象徴されるように神話によって抑制されている側面が認められる。さらに、猟銃が入る前の極めて古い伝統的な弩と呼



写真7 鹿狩りの一団(ラオス・モン族、撮影:川野)

び笛による狩猟が、現在でも豊かに伝承されており、稲作神話の中で豊かに語られる野生動物たちの物語と併せて乱獲を抑制する方向性を持っていると思われる。

しかし、村々で定期的に開かれる市場では、陸稻とともに野生の鳥獣が商品として取引の対象になりつつある(写真7)。焼畑と野生動物とが商品化の波にさらされつつある現在、狩猟がその抑制的性格を逸脱して、暴力的な方向をたどり始めている。同時に、焼畑地規制の政策は、休閑期間の短縮を誘導し、野生動物と焼畑農耕民の関係を悪化させ、乱獲や種の絶滅など狩猟の暴力性を高めていく危険性も孕んでいる。

### 狩猟の変容とその要因

現在、対象地域の狩猟は大きな変容にさらされている。その大きな要因が、国による銃利用の禁止である。その結果、狩猟が完全に禁止された地域もある。しかし一方で、銃規制により伝統的な狩猟技術が見直される場合もある。二〇〇四年に、筆者の一人、川野が訪れたラオス北部のルアンナムタムアンシン郡ホエルー村(ムシュダー族)では、新しい「カ」(弩)作りや補修がさかに行われていた。そこには、

ムアンシン郡の郡長のものだという、弓の長さが一メートルほどの大型の竹製の弩が修理に持ち込まれ、タイ・ルー族の男性も修理のために、自分の弩を持ち込んでいた。政府が「野生動物保護」の名目で猟銃を回収しているが、人びとは供出した猟銃の代替に弩を作ったり、補修しているのだという。ムシュダー族は、弩製造の専門集団の様子を呈している。

雲南省では、前述してきたように、山地民を中心とした多様な狩猟が焼畑稲作とともに重要な生業であったが、狩猟獣の乱獲、商品化、森林の農耕地への改変、野生動物の生息地減少、人口増加などの影響がからみあい、狩猟は低迷ないし衰退傾向にある。依然として行われる密猟はきびしく取り締まるべきであり、今後の野生動物保護とあわせて重要な政策課題である。

経済の視点から見ると、メコン河の中流・上流域の焼畑農耕民にとって、狩猟の意義は小さく、ほとんどなくなった場合もある。しかし、本章で詳細に述べてきたように、各地域の文化の中で狩猟の意義を無視することはできない。狩猟は、彼らの文化と対をなす生業体系の中に深く根付いていると同時に、イノシシの集団猟の場合のように、大部分の村人が参加するという社会的意義、捕獲後に儀礼がともなうという

信仰的意味の役割など、多くの目的をもった活動である。この地域の狩猟文化は今後、ますます衰退していくものと予想されるが、その詳細な記録をとり続けることは緊急の課題である。

### 【註】

- (1) 害獣駆除のための狩猟は、焼畑や森林だけではなく、収穫した作物を貯蔵する倉庫の周囲でもさかんに行われた。特に、罾やネズミ挟みなどが使用された【尹 二〇〇〇】。
- (2) ウシの群れを管理するために弾をウシの体めがけて撃って威嚇することや、大物のシカを捕獲するため眼に放つこともある。
- (3) 毒の材料としてリス族、ラフ族などはトリカブト (*Aconitum camichaeli*) を、西双版纳のタイ・ルー族はウバス (*Antiaria toxicaria*) を利用する。
- (4) たとえば、チノノ族の巴卡小寨では、野鶏を捕獲するのに銃や罾を使った。くくり罾はウォー・ツェ (*Wolse*) と呼ばれ、罾の輪の部分は地上から高さ一メートルくらいになるようにし、山の斜面に二〇〇〜三〇〇メートルにわたって一直線にはえなわ状につける。小さな家鶏の場合は首が、大きな野鶏の場合には脚の部分が罾に引っ掛かる。罾をしかける時期は一月〜三月である。捕獲した野鶏は自給用の食料としてたり、近くの町へキログラム当たり五〇〜六〇円で売られた。また、おなじチノノ族の巴漂寨ではくくり罾とス・トウ (*se tou*) と呼ばれるはね罾を用いた。ウォー・ツェでは、竹の棒を地面に何本も突き刺して並べ、野鶏が通るように誘導路をつくる。ス・トウには餌となる虫

を使う。スは「果実の実」、トウは「餌を食べる時のニワトリの動作」を表す。野鶏の狩猟期は七月〜一月である。また、野鶏は実のなる木の場所に集まってくることもある【秋道 二〇〇五 b】。

- (5) 野鶏は人間の居住地に近い森林辺縁部に棲息し、焼畑で素餌することもあり、貴重なタンパク源とされてきたが、現在では同じキジ科の緑孔雀、孔雀雉、白腹錦鶏などとともに狩猟により減少し、国家一級、ないし二級の保護動物となっている【王 一九九七・徐 一九九九・秋道 二〇〇五 b】。
- (6) 中国雲南省のチノノ族では、野鶏をおびき寄せるための竹笛が使われている【秋道 二〇〇五 b・一三五】。本章の調査地では、金属製の笛のみしか使われていないので、両者の違いについては興味深い。

### 【文献】

- 阿部卓 二〇〇二 「ジノ族村落の農耕・狩猟採集・家畜飼育」松井健編『講座生態人類学 6 核としての周辺』京都大学学術出版会、二二〜一五八頁。
- 秋道智彌 二〇〇二 「国境を越えるチョウ」『季刊民族学』九七・九六〜一〇四頁。
- 秋道智彌 二〇〇五 a 「コモンズの人類学—文化・歴史・生態」人文書院。
- 秋道智彌 二〇〇五 b 「変貌する森林と野鶏—中国雲南省・ラオス野少数民族」池谷和信編『熱帯アジアの森の民—資源利用の環境人類学』人文書院、一二三〜一四八頁。
- 池谷和信編 二〇〇五 「熱帯アジアの森の民—資源利用の環境人類学」人文書院。
- 何大勇 二〇〇三 「中国雲南省リス族における弩弓文化の基層と現代的展開」『比較文化史研究』五一・一四〜三四頁。
- 何大勇 二〇〇五 「中国雲南省西北金沙江・瀾滄江上流域のリス族に関する民族生態史的研究」(博士論文)総合研究大学院大学。
- 野中健一、秋道智彌 二〇〇〇 「国境を越えるチョウ—中国雲南チノノ族の村から」『インセクタリウム』三七(九)二七〇〜二七四頁。
- 増野高司 二〇〇五 「焼畑から常畑へ」池谷和信編『熱帯アジアの森の民—資源利用の環境人類学』人文書院。
- 刘怡、白忠明主編 一九九九 『基諸族文化大観』雲南民族出版社。
- 徐志揮主編 一九九九 『雲南野生動物』雲南教育出版社。

- 王直罕 一九九七 「西双版纳基诺族輪歇農作区鳥類多樣性編目研究」裴盛基、許建初、陳三、龍春林主編『西双版纳輪歇農業生態系等生物多樣性研究論文報告集』昆明・雲南教育出版社、九八～一〇五頁。
- 鄧向福 一九九七 「景洪熱帶山地哺乳動物的快速編目」裴盛基、許建初、陳三、龍春林主編『西双版纳輪歇農業生態系等生物多樣性研究論文報告集』雲南教育出版社、一二四～一三〇頁。
- 羅鈺 一九九六 『雲南物質文化—採集漁獵卷』雲南教育出版社。
- 尹紹亭 二〇〇〇 『雲南の焼畑—人類生態学的研究』（白坂蕃訳、林紅翻訳協力）農林統計協会。
- 尹紹亭、深尾葉子主編 二〇〇四 『雨林胶林』雲南教育出版社。
- 景洪県地方志編纂委員会 二〇〇〇 『景洪県志』雲南人民出版社、一〇五一頁。
- Donovan, Deanna 2003 "Trading in the Forest: Lessons from Lao History." In Lye, Tuck-Po, Wil de Jong & Kenichi Abe (eds.), *The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspective*. pp. 72-106. Kyoto: Kyoto University Press.
- Tayanite, D. & K. Lindel 1991 *Hunting and Fishing in a Kamnu Village*. Scandinavian Institute of Asian Studies.